

史金波・白濱・黄振華

## 文海研究

西田龍雄

西夏語の韻書『文海』『文海雜類』がロシヤ語に訳され、原本の影印と共に一九六九年に刊行されたが、以来十五年を経たいま、漢訳されて世に出た。

本書は、われわれにとって便利な扱い易い書物であつて、この労作の公刊に対して、著者たちに心から大きい祝福を贈りたい。しかし、本書には、いろいろと検討すべき問題が含まれている。

本書は、B5判の八七六頁に及ぶ大冊で、全般に西夏文字が使われるため、浄書した原稿をそのまま版にしたものである。つぎのように構成されている（括弧内は頁数を示す）。

### 一 論文

九 『文海』から見た西夏文字構造の特徴 史金波（一―二）

『文海』に反映した西夏社会 白濱（三〇―六四）

『文海』の反切系統の初歩研究 黄振華（六五―一三四）

二 『文海』校勘本（一三五―三一三）

三 『文海』校勘記（三五七―三九六）

四 『文海』漢訳（三九七―五五七）

五 『文海』影印本（五五九―六六八）

六 『文海』索引（六六九―七七六）

はじめに著者三名がそれぞれの立場から執筆した論文を集録するが、本書の主要部分は『文海』『文海雜類』の校勘本の作成とその漢語訳にあると思われる。

『広韻』の体裁にならつて西夏人が作成したこの二つの韻書については、すでによく知られている。『文海』『文海雜類』に字形の分解が与えられている点を除いては、それらの韻書は『広韻』の形と全く同じと見てよい。

以前、ロシヤ語への翻訳にあつた訳者の一人に、筆者は、どうして一字一字の意味を決めたのかと質問したことがあつた。「あなたは、どうして決めたかよくわかるでしょう」という返事であつた。この漢訳についても、同じ質問をしたい気がする。

ロシヤ語に訳された場合には、漢字との対応を直接一々考えなくても、あまり気にならなかつた。ところが漢訳するととなると、やはり特定の西夏字にどの漢字をあてるのか

の配慮が重要であるし、それがまた正確な訳し方と密接につながってくる。筆者が拙著『西夏文字』の中で、この『文海』『文海雜類』に見られる西夏人自身の注釈にもとづく方法を第五の解説法としてあげたが、これは厳密に考えるとなかなかむづかしい。たとえば、そこであげた同義あるいは類義の文字に牛<sup>1</sup>、牛<sup>2</sup>、牛<sup>3</sup>のような指標をつけて弁別しておいても、それぞれの正確な意味の解明は、根気よく続けていかねばならない。

筆者の考えている西夏字と漢字との関係と本書の著者の考えの間には、少し距りがあるように思える。筆者の手許にも『文海』『文海雜類』の和訳の草稿があるが、その刊行に躊躇しているのは、つぎの点で十分満了した段階に到達していないからである。

1 一つの西夏字の詳細な意味を知り、それにもっとも適した漢字を与えるためには、これらの韻書の注釈に支えられた実際のテキストにおける使用例に頼らざるを得ない、少くともかなりの範囲でその検討を完了し、次第にその範囲を拡大していくのが最良である。

2 個々の文字の意味、つまり「字義」と、文字が連続した単語としての意味、「語義」を区別して、翻訳には、後者を正確につかんでいく必要がある。

この二つの点で、本書の著者は配慮に欠けるところがあ

るのではないだろうか。

まず、つぎに数例を見本にして、拙訳(草稿)と比べてみたい(字形の分解の部分は省略した。注釈文の番号は筆者がつけたもの)。なお、文中のゴチック数字は最後に掲げた「西夏文字表」の当該の数字を付した文字をさす。

17-102  
(411)

A 後

𐵑𐵒𐵓 𐵑𐵒𐵓 𐵑𐵒𐵓 𐵑𐵒𐵓 𐵑𐵒𐵓  
𐵑𐵒𐵓 𐵑𐵒𐵓 𐵑𐵒𐵓 𐵑𐵒𐵓 𐵑𐵒𐵓

7-141  
(42)

B 𐵑

𐵑𐵒𐵓 𐵑𐵒𐵓 𐵑𐵒𐵓 𐵑𐵒𐵓 𐵑𐵒𐵓  
𐵑𐵒𐵓 𐵑𐵒𐵓 𐵑𐵒𐵓 𐵑𐵒𐵓 𐵑𐵒𐵓

8-173  
(48)

C 𐵑

𐵑𐵒𐵓 𐵑𐵒𐵓 𐵑𐵒𐵓 𐵑𐵒𐵓 𐵑𐵒𐵓  
𐵑𐵒𐵓 𐵑𐵒𐵓 𐵑𐵒𐵓 𐵑𐵒𐵓 𐵑𐵒𐵓

この三つの文字の注釈はほぼ一致していて、相互につきの関係が成立する。A1 || B2 || C2, A2 || B1 || C1, A3 || B3 || C3, A4 || B4 || C3。それを翻訳した漢文も、したがって、同じ関係を示す筈であるのに、実際はかなりの食い違いを見せているのである(番号と句読点は筆者がつけたもの)。

A 忠正 此者心<sup>1</sup>正也、<sup>2</sup>正直也、

正德也、徳忠<sup>4</sup>為者也。

B 忠 此者正直也、心清也、  
正徳也、為忠者是也。

C 耿 此者耿直也、忠也、  
為正直忠者是也。

注釈の相互關係は、A 1 心正也 || B 2 心清也 || C 2 忠也、

A 2 正直也 || B 1 正直也 || C 1 耿直也、A 3 正徳也 || B 3 正徳也 || C 3 正直也、A 4 徳忠為者也 || B 4 為忠者是也 || C 3 為(正直) 忠者是也となる。第一にA、B、Cに与えられた漢字が統一的に使われていないことがわかる。

このような不統一さは、まず字義の決め方と関連する。Aには「華嚴經」などで、漢字の「爽」(さわやか)があった。B、Cの単語については、筆者は実際の使用例をまだ見付けていない。

それに「耿直」とか「正直」をあてるのは、たぶん推測によっている。この『文海』『文海雜類』を全部訳出しよとすると、この推測の部分が相当に含まれることになるのである。A 4は、字義としては、徳と忠(あるいは正)であるけれども、この二字からなる単語は、多くの經典で漢語の「真正」、「質直なる(者)」にあたる。これはつねに二字で使われるから、その「語義」で訳さねばならない。試訳では、つぎのようになる。

A 爽者心爽也、正直(?)也、

真正也、質直なる者也。

B 正(直)者正直也、心爽也、  
真正也、忠なす者なり。

C (正)直者正直也、爽也、  
真正、忠なす者なり。

Aの字形分解は、原本が不鮮明で判読し難い。Bの左上の文字は、1(亮?)が正しい。2は宀(くぼむ)の意味で「法華經」、亮とは別字。そしてCの左上の文字は(腦)の意味ではない。原義不詳(上声四十二韻、「同音」舌頭音類ゴロ)、腦が発音を示しているのであれば「腦」とすべきである。本書では漢字が意味を示すときには( )で、発音をあらわすには「」で囲んでいる。

テキストの使用例から最適と思われる漢字をあてることによつて、その字義をより明瞭に理解できる場合がある。たとえば、

明

此者明達也、此方

所視彼方見之謂。

漢訳

此者明達也、此方  
所視彼方見之謂。

この明を徹に改めると、試訳「徹者明達也、此方、観て、彼方で現わるの意」つまり、この文字の字義は「つき抜け





眠の下(と)夢の偏に分解される。なぜこの字形を簡単に18(眠)の偏と19(夜)の全の組み合わせと見ないのだろうか。説明に使う夢という字形もへ夜とへ見るを合体した会意字である。そこで提示しているのは、多くの場合、文字の連想関係あるいは連合関係であって、字形成立の原則ではない。西夏文字の組織は、『文海』における文字分解とは離れたところで組み立てていかねばならない。

さて、史金波は、つぎの七つの項目の下に、西夏文字の構造を説明する。

### 一、西夏文字の單純字。

單純字とは字音と字義の面から見て、それ以上小さい単位に分析できないものと定義する。『文海』では、單純字の存在をまっとうから分析してないため、單純字の存在を認めていないように見るけれども、『文海』の字形の解釈をよく分析すると、側面からはつきりと單純字の存在を反映させていると述べ、つぎの三つの單純字指示の方式を認めている。

- (一) 減去左部 たとえば20「虫」の左を除くと21「昆虫」
  - (二) 減去頭部 たとえば22「七」の頭を除くと23「八」
  - (三) 減去偏傍 たとえば24「十」の偏を除くと25「十」
- しかしあげている例は僅かであるし、單純字の認定には

合体字との関連において派生法を確定しておく必要があるだろう。また單純字の由来は研究する価値のある問題とし、たとえば26は、多足の虫の形を、27は人の行くさまを象る象形と関係すると言う。筆者の考える文字要素相互の関連を参照していただきたい。

最後に單純字を二種に分け、一つは常用語で固有の字義をもつもの、例28「不」や29「樹」や、30「鉄」、他の一つは借用語、地名、人名などの文字、例31「都」、32「和」、33「果」(「」括弧内はいずれも発音を示している)であるとする。

### 二、会意合成法と音意合成法が造字の主要方法。

この項目では西夏字構成の八、九割を占める造字法を(一)両字合成一字、(二)三字合成一字に分け、具体例を豊富に示している。史金波の字形構成様式の分類で面白いのは、西夏語文法の特徴を文字の組み立てに導入した試みである。二字を合一して作られる会意字には、(1)並列式(等位関係)、(2)偏正式(主従関係)、(3)動賓式(動詞目的語関係)、(4)主謂式(主語述語関係)、(5)補充式(動詞補語関係)があるといる。たとえば、(1)「寛」と「濶」を並べた「広(濶)」、(2)「慧(かしこい)」と「蛇」を左右に並べた「龍」などは、形容詞・副詞が名詞を修飾する関係にあって、左右の配置

は西夏語文法と合う。また(3)動賓式は、「恐」と「有」を左右に置いて作られた「疑」は、文法と合うが、「懺悔」と「罪」を左右に並べる「刑」の例は、つねに目的語を動詞に先行させる西夏語文法と合致しない。ということは、合体字の構成は、厳密に文法の原則に縛られて為されているわけではないことを意味する。

三、反切上下字合成は、西夏文字を構成する特殊な方法である。

反切法によって構成される字形については、拙著『西夏文字』(一八四頁―)の中で、『同音』の注を根拠に例示したが、『文海』では、そこに与えられた反切と、字形分解の文字が合致するという形で極めて明瞭に示されている。それらは人名、地名、仏典中の陀羅尼の音写などに使われる本来西夏語の音節にはない形である。史金波は、「十二世紀西夏地区ですでに併音的方法を採用して造字して」いたことに注目し、「この方法で造字したのは西夏文字がはじめてある」と言う。

四、間接音意合成は、漢語の影響を受けた造字法であり、長音合成は梵語の長音字を注するための造字方法である。

この見出しの中で間接音意合成といっているのは、字形の一部を表意字からとり、別の一部を表意ではなくまた直

接を表音のはたらきをもたない字形から組成するものと説明する。この説明はわかり難いが、たとえば34地名分(×<sub>1</sub>×<sub>2</sub>×<sub>3</sub>)は、漢語の分に該当する35「分ける」を意符とし、表音も表意も関係しない36の冠をつけて作られた字形であるが、その構成に漢語の影響がはたらいっているという。37

「漢」(音写字)が、38「漢」(表意字)と39「姓名」の旁から作られるのも同様である。筆者の分析では、40「分」は41(意符)に42(木冠)を、43×<sub>1</sub>×<sub>2</sub>「漢」は44(意符)に45を、添加した派生音写字として簡単に扱っている。(なお『西夏文字』一七七頁―参照)。外来語の短母音と長母音を表記する字形の対立は、『西夏文字』一七八頁を見られた。これが陀羅尼の音写のために考案されたものであることは明らかである。

五、互換法は近義字を構成する一種の方法である。

たとえば、「地」と「坤」のように、筆者が対称字と呼んでいる字形を、ここでは互換法による構成という。そして、それを五種類に分類する。(1)左右互換(たとえば指と爪、(2)中間不変、左右互換(因と縁)、(3)上部不変、下部左右互換(褐と衫)、(4)一辺不変、另一辺左右两部分互換(水と魚)、(5)上下两部分互換(枝と葉)。

典型的な対称字である左右同形字(集、唇など)と中央

にたて一画を書きその左右に同形の要素を並べる字形(秤立など)は、上にあげた五種類とは別に扱っている(拙著『西夏文字』一五〇頁―参照)。筆者は全体を四種類に大別する。

六、形近字の字義と偏旁部首。

この項では、字形が類似する文字間の関係を、(1)字義相関、(2)字音相同、(3)音、義皆無関に分ける。(1)はたとえば「知」に冠がついて「聞」となるような関係、(2)は46「渡」と47「実話」(これは「白状する」の訳がよい。)のような関係、(3)は字形が酷似するが意味発音ともに関係のない48「以」と49「小」のような関係を指している。(1)と(2)の類似関係は、派生関係としてとらえると、筆者の言う「接合法」または「置き換え法」によって成立している。(『西夏文字』参照)(3)の字形については、筆者には『文海』のロシア語訳の書評の中であげた。

接合法、置換法の派生手順はまた省形・省声としてとらえることもできる。本書の二四頁以降に省形・省声が述べられるが、たとえば、50「鳥」と51「黒」から52「鴨(わし)」が作られ、同じ「鳥」と「黒」から53「烏鴉(からす)」が構成されるのは、違った派生法がとられていることを説明しなければならぬ。(この鴨と烏鴉の二つの文字の意味

を本書二六頁六行目では逆にしている。上段が「わし」で、下段が「からす」である。)

かりにこの二つの文字について、『文海』から離れて、筆者の分析を示すと、つぎようになる。



1は「黒」の偏と鳥の旁を「置き換え」た字形(省形)、わし。2は「黒」に鳥の偏を「接合」した字形、からす。ほかに「黒」の旁を除いて、虫偏と「置き換え」ると「おたまじやくし」54が作られ、「黒」に水冠を「接合」すると「濁水」「へどろ」55が構成される。

偏旁などの要素と意味のつながりに限界があることは、つまり56(人偏)をもつ文字にすべて人間を考え得ない事情は、筆者も書いている。しかし、字形を組み立てる位置、冠、偏、旁、底などの意識とその位置にたつ要素と意味の関聯は、ちょうど漢人の漢字に対するように、西夏人も西夏字に対して、はっきりと意識していたと思われる。少し後代の韻書(たとえばコズロフ収集品No. 4152, 7837)では、『文海』とは違って、偏旁などを特定の符号で指示する



のは、その証拠の一つとできる。

最後に、

七、西夏文字を構成する場合の形体の変通（自在変化）。

この項では、たとえば水偏は57で、水冠は58、傍の位置では59になるなどの例をあげる。これは羅福長（13）の時代以来知られていることである。

いま述べたことと関連して、『文海』以後に作られた韻書の注釈について、筆者のノートから少しだけ書き出してみよう。

コスロフ収集品No. 4152, 7837（断片）の中に、上声韻に属する文字の注釈が若干含まれている（『文海』には上声韻の部分が残っていない）。

𪎭	𪎭	𪎭	𪎭	𪎭	𪎭
𪎭	𪎭	𪎭	𪎭	𪎭	𪎭

(L29) 蝌蚪 虫全  
 蝌蚪者蛙子(匣) 即蝌蚪なる。

この字形分解は、実際は見出し文字の右側に置かれていますが、全と偏は符号で示されています。

𪎭 𪎭 𪎭 𪎭 𪎭 𪎭 𪎭 𪎭  
 𪎭 𪎭 𪎭 𪎭 𪎭 𪎭 𪎭 𪎭  
 (L3) mññ xññ (部姓) mññ 者先西夏人の兄部姓なり。

これとよく似た注が No. 7837 にもある。

𪎭 𪎭 𪎭 𪎭 𪎭 𪎭 𪎭 𪎭 𪎭 𪎭  
 mññ 者部姓(也) 先老部姓(也) 西夏の兄謂。

No. 4152  
 𪎭 𪎭 𪎭 𪎭 𪎭 𪎭 𪎭 𪎭 𪎭 𪎭

飯者粥飯(也)、米爨（14）即名飯(也)。  
 見出し文字の右側に字形分解60「菜冠、粥底」があり、冠と底が略号で示される。左側には、奇妙な形でこの文字の反切が置かれている。

A 𪎭 𪎭 B  
 C 𪎭 𪎭  
 A mblè (上8)  
 C ša (上15)  
 B xa (上15)

つまりABでもACでも、同じ音節mbaを指示する。これらの韻書の注釈が簡潔に書き改められたものである

ことは、平声韻字について、『文海』の注と対照すれば、ただちに判明する。

たとえば『文海』平声八十六韻の「人」には、

𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎  
𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎

人 偏 人者人也、人也、者也、人  
偏 民也、庶民?也、陸上人の意。

の注があるが、No. 4153では、つぎのように簡潔に書き改められている。

𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎  
𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎

人 偏 人者人、人、者、人民  
庶民、陸上人の意。

このような韻書断片の研究は価値がある。

白濱の論文は、一、経済状況、二、社会政治状況、三、生活与文化の三項目のもとに、『文海』の説明から西夏人会を推測して大へん面白い。また『文海』字条分類舉例一覧表というのがあるが、筆者もすでに『西夏の仏教』(一九六九)、断片ではあるが、筆者もすでに『西夏の仏教』(一九六九)、

「西夏」(一九六九)、「西夏王国の性格とその文化」(一九七〇)などの中でいくつが発表している。

この研究は、文字の正確な読み方と密接に関りをもっており、白濱の今回の結果については別の一文において詳しく検討してみたい。ただここでは、西夏にも文字創制以前に、記憶を助けるため結繩が使われた段階があったと述べていることにふれておこう。

白濱のこの主張は、具体的には、89-241 61「記」(試訳「紀」)、雑18-142 62「結草」(試訳「草」)、25-133 63「縛」(試訳「記」)につけられた注釈を基にしている。しかし、「第一字的西夏文由「縛」和「信」兩字各一部分組成」とあるが、『文海』の分解では、「繩」の旁と「疑」の旁から成るとなっており一致しない。『文海』の注釈は、試訳「記者記也、記也(漢語の音写キヒ音ヒ)、憶也、繩、信もの也」(漢訳「此者記也、計也、記也、繫信用也」となっている。また「第二字由「繩」字之半辺和「記」(漢語「記」的注音)之半辺組成」と述べるのは、「第三字」の誤りであり、しかもそこでは「記」(キヒ)の旁と「紀」の旁に分解しているのである。

第二の文字は、「結草」と漢訳されているが、この文字は『孫子』行軍篇第九の中で、64と使われ、漢文「衆草多障

者疑也」(衆草障多き者は疑なり)にあたる。西夏文を逐字訳すると、「草厚く草を結ぶ(を見て)疑をもてば吉」となるが、その割注に65「魏操(=曹操)曰衆草人如結人疑せるの意」とあるように、この文字はある種の草を指している<sup>(11)</sup>、結繩と直接関係があるとは、筆者には考えられない。

白濱もあげているように、三番目の「記す」には涼州感応塔碑文に、66「記文」の使い方があつた。そのほか、同じ二つの文字が『中華伝心地禅門師資承襲図』では、漢語の「伝記」の訳にあてられている<sup>(12)</sup>。

これらの事実から西夏に「結繩」が使われていたと言えるかどうかはなお検討がいるが、「紀す」や「記す」の文字が「繩」「繩を結ぶ」と関りをもっていることは確かである。本書では各西夏文字の音形式はときに注音漢字によって与えられているのみで、全般に再構成形式は付けられていない。三論文の最後にある黄振華の「文海反切系統の初步研究」は、反切の系聯関係を示す形で、その試みを提供している。しかし、基本になる反切の系聯関係と音推定は、なお作業の途上にある感じが強い。ここで、それらを逐一批判する気持はないが、とくに韻母について、再構成の原則が全く立てられていないのが残念である。たとえば、筆

者が以前に提示した攝といった考え方や、開口韻・合口韻の対立など韻組織の基本的な事柄を無視している。読者は筆者が最近発表した「西夏語韻図『五音切韻』の研究」と比べていただきたい<sup>(13)</sup>。(拙文にも印刷上凸版の誤りや、再考する必要のある個処があるが、近い将来各文字毎に再構成形をつけた発音字典を公刊する予定である)。

反切の音価の決定について、二三の具体例をあげると、たとえば声母について、八一頁、67の声母をここでは  $h$  とするが、これは平声一韻で68(平三〇韻)と系聯し、69につながるから、 $h$  を推定するのが正しい。(拙論「五音」(下)一七八頁系聯表参照)。70の声母も  $h$  とするが、これは  $h$  が正しい。反切上字の系聯関係の設定は厄介であるけれども、黄氏のその作業は未完成であると言わざるを得ない。

韻母については、たとえば平声十韻の反切下字を三類に分けるが、(一)の上の四字は開口韻、下の二字ははっきりと合口韻で、互に系聯しない。実際には四類に分かれる。

十八韻の下字も5字×3字で示すが前者は開口韻で、後者は合口韻である。反対に平声二十三韻は全体が一類として系聯する。

黄氏があげている具体的な推定音価は、筆者にはどうしても納得がいかない。たとえば三韻を  $g$ 、 $g$  とし、七韻を  $g$

ㄐとす。ㄔとㄑを同じ韻類とする『文海』の編者が、なぜㄔとㄑを別の韻類としたのであろうか。

黄氏の推定音では、『五音切韻』の各韻図における西夏文字の配置を統一的に説明することは困難である。

大へん気になる誤りもある。注の中のㄒを「上音也」と訳している点である。平声は平音とは言わずに平声と訳しているから、この「上音」は「上声」とは違ったものと理解しているためであろう。これは「上声也」と読むべきで、平声韻の中に混在する上声韻字に対する注である(拙文『東洋学報』(一九六九、613頁)、『西夏文華嚴経III』(一九七七、八九頁注27))。このことへの理解の如何は、西夏語韻組織全体の理解の程度を反映している。

全般に本書で従来の研究をほとんど取り上げていないのは極めて遺憾に思われる。

二〇〇頁を越える文字索引は有用である。ただ部首の引き方に工夫がほしかった。たとえば画引にするなど簡単な配慮でもっと有用なものとなったであろう。

この『文海研究』は、以上述べたように多くの問題を含むが便利な書物であり、今後の西夏語研究に大きく貢献することであろう。

(北京、中国社会科学出版社、一九八三年刊、B5判 八

七六頁)

### 註

(1) 拙評E・N・クチャーノフ等著『文海——タングート語刊本の複製——』『東洋学報』五二巻二号、一九六九、参照。

(2) 西夏語韻書の系統については、西田龍雄『西夏語韻図「五音切韻」の研究』(上)『京都大学文学部研究紀要』第二〇、一九八一、参照。

(3) 西田龍雄『西夏文字』紀伊国屋書店、一九六七。増補版、玉川大学出版部、一九八〇。

(4) *ṣṣ*については、西田龍雄『西夏文華嚴経』II 西夏譯経雜記二三頁以下(京都大学文学部刊、一九七六)を参照されたい。

(5) 「夢・夢見る」は、二字並べて使う。*\*ṣṣu(m)-miën* (ㄑㄨㄥ)前者は名詞、後者は動詞である。

(6) 『西夏文字』IV西夏文字の構造、一二一頁―を見られたい。

(7) 『東洋学報』五二巻二号。

(8) 省略字形については、西田龍雄『アジアの未解読文字』大修館書店、一九八二、一一五頁―参照。

- (9) *ng* は、*ON(LH)* と二音節で、西夏の兄の部族を指す。<sup>72</sup>
- (10) それぞれ『南都仏教』二二巻、『モンゴル帝国』世界歴史シリーズ12、『岩波講座世界歴史』九巻に収録。
- (11) レニングラードのケピンは、この文字を *депо* と訳しているが誤りである。K. B. Келпін, *Сынъ чзы в танытском переводе. Москва, 1979. 『孫子』の西夏文は、このテキストによっている。*
- (12) この禅籍については、『西夏文華嚴經』I、一九七五を見られたい。
- (13) 注(2)(上)一九八一(九一一四七頁)、(中)一九八二(一一〇〇頁)、(下)一九八三(一一八七頁)。

西夏文字表

1 𐵀	2 𐵁	3 𐵂	4 𐵃	5 𐵄	6 𐵅	7 𐵆
8 𐵇	9 𐵈	10 𐵉	11 𐵊	12 𐵋	13 𐵌	14 𐵍
15 𐵎	16 𐵏	17 𐵐	18 𐵑	19 𐵒		
20 通	21 承	22 苜	23 𐵔	24 𐵕	25 𐵖	26 𐵗
27 𐵘	28 𐵙	29 𐵚	30 𐵛	31 𐵜	32 𐵝	33 𐵞
34 𐵟	35 𐵠	36 𐵡	37 𐵢	38 𐵣	39 𐵤	40 𐵥
41 𐵦	42 𐵧	43 𐵨	44 𐵩	45 𐵪	46 𐵫	47 𐵬
48 𐵭	49 𐵮	50 𐵯	51 𐵰	52 𐵱	53 𐵲	54 𐵳
55 𐵴	56 𐵵	57 𐵶	58 𐵷	59 𐵸		
60 𐵹	61 𐵺	62 𐵻	63 𐵼	64 𐵽	65 𐵾	66 𐵿
67 𐶀	68 𐶁	69 𐶂	70 𐶃	71 𐶄	72 𐶅	

批評と紹介 西田

第六十五卷 四二一